

校長室から

校長室だより 第1号
令和元(2019)年7月19日発行
文責 宮城県古川工業高等学校
校長 佐藤 誠



本校では、全日制定時制ともに今日7月19日(金)が夏休み前の最後の授業日であり、年間行事予定では7月21日(日)開始となっているが、実質的には明日7月20日(土)から、8月25日(日)まで夏季休業に入る。日を数えると37日間ある。生徒諸君にはこの貴重な夏休みを、ぜひ有意義で充実した時間として使って欲しいと思う。

さて、4月に赴任してから3ヶ月半が過ぎるが、生徒諸君や保護者の皆さんに直接に自分の考えを伝える機会があまり多くないと感じている。校長室の窓を半分開けて、吹き込む微風に白いレースのカーテンが内側に膨らみ揺らいでいる向こうで、グラウンドを駆け回る生徒の澆刺とした声が響くのを見ながら、つらつら考えていることを文章にしてお伝えしたいと考えた。ただ、何しろ今のタイミングで最初の号なので、これからどのくらいの回数を出せるか分からないが、とにかく始めてみようと思い、この文章をまとめています。おつき合ください。

○ 人とのつながりの中で生きる：学校のサポーターに支えられて

古川工業高校に赴任して、いろいろな場面で感じるのは、学校に関わる方々、たとえばPTAや同窓会あるいはETAの役員の皆さん、学校の様々な事業に協力いただいている企業や団体の担当者の皆さん、近隣の地域住民の皆さん、そして主に大崎市内の各種公共施設の関係者の皆さんなどから、学校と生徒に対して強い期待を寄せていただいていることだ。

「気持ちいい挨拶ができていね」、「部活動、活躍しているね」、「卒業生が頑張っている」など、さまざまなお褒めの言葉もいただいている。それは確かに、多くの運動部・文化部が東北大会や全国大会に進出したり、各種コンテストで入賞したり、賞状伝達式で実に多くの賞状を獲得しているのを目の前で見ている生徒諸君には、当たり前と思えるかもしれない。

しかし、もし部活動の活躍やコンテスト入賞がなかったら、学校や生徒への期待感はなくなるのだろうか。そんなことはないと思う。なぜなら、昨年の野球部の県大会決勝進出や、今年のバレー部の県総体決勝進出のような場面があれば、この上なく盛り上がるのは当然としても、そうでなくても単なる活躍の有無だけにとらわれない、根底からのゆるぎない期待感が存在するからだと思う。

その由来はどこにあるか。答えは、自分の理解ではおそらくは卒業生の影響力が大きいと考える。これはすなわち同窓会という組織の影響力かと言えば、必ずしも組織としての力ではないと思うが、あえてくくってしまえば同窓生による影響力という視点に立てば、同窓会の影響力といっても言い過ぎではないかもしれない。古川工業に入学する生徒は、昔から現在まで変わることなく大崎管内からの入学者が多く、卒業生はこれも変わらず管内あるいは県内への就職者が多いという状況がある。これはつまり、卒業生が学校の位置する大崎市と周辺に多く在住し、母校への意識を持ちつつ生活している中で、家族・親類縁者や近所の人など関係する人が古川工業に生徒を送り出し、直接的あるいは間接的に学校との関係を深めていき、より根強いサポーターとなっているのではないか。

7月13日(土)に、東京で開催された関東同窓会総会に参加した。会議とともに、旧古川女子高平成6年卒業生のボーカリストによるピアノ伴奏でのミニコンサートという内容だった。参加者37名で、その中の最高齢は昭和29年卒の方で、今年で84歳になる同級生が5名参加されて、いずれも大変お元気で大いに会を盛り上げていた。その方たちを筆頭に、後輩に当たる各年代の参加者の方々がいて、いろいろな話題で盛り上がる中、やはり集約されるのは母校の今の生徒の様子についてだった。そして、先輩方が自分の過ごした高校生活に重ね合わせ、今の後輩生徒がより活動しやすくなるように、さらなる活躍を期待して、活動資金の援助を始め多大なる御支援を頂戴した。

同窓会の先輩方に、母校と後輩に向ける格別の思いがあるのは間違いないと思うが、たとえ卒業生でなくとも、学校と生徒の活動に関心を寄せてくださる方が大勢存在することもまた実感であり、感謝に堪えない。生徒諸君は、そして私を含めた教職員は、学校を支え見守ってくださる多くのサポーターがいることを意識し、感謝の気持ちを持って日々の取組を進めることが大切だと思う。

最後に生徒諸君へ。「人間は社会的動物」といわれるが、日々の生活は必ず誰か他の人との関係によって成立している。生徒諸君には、自分が他の人に支えられているのと同時に、自分も他の人を支えているのだということも自覚して、お互いの関係によって何物かを創り出せるような、あるいは何事かを成し遂げられるような、プラスの関係となれるよう、自分の周りを振り返ってみてください。そして、おそらく生徒諸君の一番のサポーターである家族に、たまには「ありがとう」と言おう。